

がんサバイバーを支える

—栄養・身体活動支援の充実に向けて

特集にあたって

栄養療法を通して、がんサバイバーを支援する

治療技術の進歩により、がんの生命予後は改善し、5年生存率は70%にまで上昇してきた。「がんの治療後」までを踏まえた計画が求められるようになり、サバイバーシップについても関心が高まってきた。まさに「がんとの共生」の時代が到来した。

他方、わが国特有の課題に、超高齢社会の到来がある。わが国では、がんの診断を受ける方の73%が、がんで亡くなる方の86%が高齢者でもある。このことから、わが国においてがんのサバイバーシップとは、「がん治療を受けた高齢者をいかに支えるか」という課題であることがみえてくる。

しかし、わが国のサバイバーの議題は、アピアランスと両立支援に留まりがちである。議論が展開しない背景には、サバイバーの実態が確認されていないまま、イメージで議論がされている問題もある。がんサバイバーのうち、AYA世代・働く世代の割合は5%程度であり、9割以上は高齢者世代ではないかと推測されている。実際、高齢化率がわが国ほど高くない米国でもサバイバーは“silver TSUNAMI”と呼ばれ、高齢者をいかに支えるかが議論されている。

高齢がんサバイバーの多くは低栄養のリスクを抱えており、避けて通れない課題である。低栄養は、身体機能の低下や介護負担の増大、予後の悪化と明確な関連がある。われわれがん診療に携わる医療者は、がん治療に関連した低栄養のリスクを認識し、予防・対応を進める必要がある。

これら近年のがん医療の変化と取り巻く社会状況を踏まえ、高齢がんサバイバーへの栄養療法の必要性・重要性の高まりから、「がんサバイバーを支える—栄養・身体活動支援の充実に向けて」を特集として取り上げることとなった。がんサバイバーの実態を確認し、求められる対応をとともに検討していきたい。

国立がん研究センター東病院 精神腫瘍科
小川朝生